日本における医学図書館の歴史

−戦前の大学医学部・医科大学に附属する図書館を中心に−

堰向　志穂

筑波大学大学院図書館情報メディア研究科*

対象時期を明治期から戦前までに限定し、日本の医学図書館の歴史を追う。本研究での‘医学図書館’とは、大学医学部・医科大学に附属する図書館を指し、もっぱら医師や教授、研究者、医学生を図書館サービスの対象とする。

明治期から戦前までの医学教育機関を眺めると、複線型の医学教育制度が採用されていた。1877（明治 10）年に東京大学が創立され、医学部にはすでに図書室にあたる書籍室が存在し、図書が管理されていた。東北帝国大学附属図書館では 1915（大正 4）年に医科分館が設置された。ここでは司書を中心とする医学図書館運営の方法が研究された。その一つとして図書館資料の集中管理を行い、効率的な雑誌購入によってタイトル数を伸ばすことができた。

1922（大正 11）年に新潟、岡山、千葉、金沢、長崎に官立医科大学が設置され、附属図書館が設置された。1927（昭和 2）年に現在の日本医学図書館協会の前身、官立医科大学附属図書館協議会が設立された。同協議会は、図書館間の協力を推進し、相互貸借を一層効率的に行うことができるよう活動を展開した。

当時、外国雑誌購入は書店を介して行われていたが、円価暴落後は特にドイツ雑誌の価格の高騰が著しく、英米仏などと協力し問題解決に取組んだ。第 2 回国際図書館会議において、ドイツ政府の補償により 2 割 5 分の価格引下げを実現することができた。その他の活動では、『医科大学学術雑誌共同目録』の初版が 1931（昭和 6）年に刊行された。さらに分類法の統一に向けた動きが見られたが、協議会加盟館のなかで統一は見られなかった。

司書、書記を中心とする図書館運営の方法は、欧米殊に米国に範を取るものであった。そして司書だけではなく教授の理解と協力も不可欠であったことを忘れてはならない。

医学図書館員の役割とは、利用者が利用しやすいように資料を組織化して提供することであるとともに、“Doctor of Doctors”として業務にあたり、医療従事者や研究者の縁の下の力持ちとならなければならないとされた。医師が求める最新の情報をより的確かつ迅速に提供することは、間接的な医療への貢献とみなすことができる。これまでの活動を振り返ってみても、当初から高い理念を掲げ、医学図書館活動が繰り広げられてきたことが理解できる。

* 独立行政法人 日本原子力研究開発機構 研究技術情報部 情報メディア管理課